



『トクシマ・アンツアイガー』

第2巻

第6号

徳島 1915年10月31日

今後の戦争におけるドイツとトルコの 利害の共通性はどこにあるか（2）

イギリスにとって、ロシアの軍艦が黒海から地中海へ出られるかどうかは、どうでもよいことではあり得ない。というのは、それはもしかすると、インドというイギリスの主要なる生命線への海路を脅かしうる敵と言えるかもしれないからだ。この理由からイギリスはフランスと共に、ロシアと戦っているトルコのためにクリミア戦争に介入したと思われる。

ところで、ボスポラス及びダーダネルス海峡をロシアのものにさせることに、イギリスは同意したかどうかを我々は知らない。いずれにせよこの問題では、以前よりずっとロシアに迎合的な態度を示しているように思われる。

以前の政策からすると、この目に見えるイギリスの後退は事前に言明さ

れていたのだろうか？日本の勝利によってロシアが東アジアで後退させられた、それによってロシアのこの方面での拡張政策に先ず門が掛けられた後、ロシアはその関心の目をペルシアに集中した。ここでロシアはイギリスと衝突した。しかもそこはイギリスの最も敏感な所だ。イギリスはペルシアの一部についてロシアと、英露の利害圏で一致することで了承せざるを得なかった。これによってロシアはインドに接する隣人となった。ロシアの願望はこの危険な地点からそらされなければならない。そしてそのそらす対象がトルコとなった。多分イギリスが期待していることは、もしロシアに地中海への出口が開ければ、ペルシア内がロシアから完全に自由になることだ。

更にイギリスは、トルコの分割でも直接的な大きな利害をもっている。というのは多分イギリスはアラビアとメソポタミア領有を念頭にし、そのことでエジプトとインド間の陸上連絡が整えられることになろう。フランスは地中海の植民地帝国をトルコからの相続遺産で、おそらく同様になんり拡張することが出来よう。またもしかすると更に一部が、最も若い植民地帝国であるイタリアにも転がり込むことになろう。

たとえトルコがわれわれに味方すると宣言していなかったとしても、多数派協商諸国が勝利すればトルコの運命は決せられたであろう。そのことはトルコの指導階層も認識し、次のような方向をとった。すなわち彼らの帝国はわれわれと共同でその独自の繁栄のために戦いかつ勝利するのだという勇気ある決断を下したのである。

日本の漆工芸について

日本の工芸品については、磁器と並んでおそらく漆器がヨーロッパでは最もよく知られている。

日本人自身もこの技術の発展を誇りにしている。それというのも、漆器

は他の大抵の工芸のように中国から日本へ伝来したものではなく、日本の土壌で成立したからである。5世紀には既に漆工芸はある種の頂点に達していた。日本人は漆器をとて評価し、優れた漆器には大金を投じる。

日本の漆は紛れもない植物性物質で、漆の木の樹液から抽出される。この原料がろ過された後に樟腦で薄められて、すぐさま塗られる。湿度の高い部屋で乾かすと、硬くてほとんど溶けることのない塊になる。日本の漆は熱湯もアルコールも用いたりしない。日本人は長年お皿で熱い酒やスープを飲んできているが、それでも漆が傷むことはない。

更に日本の漆は抜きん出た特性を持っている。つまり、金粉や銀粉（いわゆる金色ワニス）、あるいは可能なあらゆる色を加えて、突出した輝きを出すのである。

漆工芸の発展では、ワニスに金粉で描く技術が重要な役割を演じている。その際、金粉で描かれた図柄に再度漆を塗り、それから漆を擦り取って磨くと、輝くばかりに美しい金色の絵が現れる。

漆は実にさまざまな物の製作に用いられる。ここで特に言及するのは、仏壇等の宗教文化に関わる物である。日本の漆工芸も安価な大量生産の被害を被っているのは残念なことだ。ヒタミ（？）という日本人がこの点について次のように記している。「進歩が生産力によって推し量られるとすれば、現下の漆産業の状況を喜ぶことが出来るのではあるまいか。しかし我々が正直に言わねばならないことは、漆の技術が数年前から、日本の技術に名誉をもたらす非常に重要な傑作を産み出したことだ。今日、漆職人は過度に急いで働き、余りに急いで金儲けを欲している。かつて純粋な工芸産業は、日本の漆製品を安く手に入れようとする外国と、贅沢品を安くしか買わない一般庶民からの要求の影響下で取引された。それにも拘らず漆工芸作家が、例えばヨーロッパやアメリカで売られた製品から判断して、先人の伝統作品をすっかり忘れた、と信じることは許されない。彼らは反対に今なお彼らの工芸の優れた技術と技法を有している。ただ彼らが芸術家的誠実さを放棄したに過ぎない。彼らに相応のお金が支払われることが

望まれる。そうすれば彼らは仕事に必要な時間を注ぐことが出来るし、かつての漆器と同じように見事な新しい漆作品が生み出されるであろう。」

漆器の輸出は微々たるものではない。その額は、

1898 1,600 万マルク

1900 2,100 万マルク

1905 2,500 万マルク

と絶えず増えつつある。

第 25 回コンサート 10 月 31 日

演奏曲目

- | | |
|--------------------------|----------|
| 1) 剣闘士の入場 勝利の行進 | フチーク |
| 2) オペラ『マルガレーテ』から大ファンタジー | グノー |
| 3) ヴェーザー河の畔で | プレッセル |
| オーケストラ付太鼓のための歌 | |
| 4) ベルリンは揺れる | モレナ |
| 人気オペレッタのメドレー | |
| 5) 万歳、皇帝来たれり 自動車行進曲 | トランストゥール |

第 25 回トクシマ - オーケストラ・コンサートへの 一通の手紙

これはほとんど驚くほどだね、と最近僕の友人が言った。この音楽、この練習、僕の神経、これはどんな馬でも耐えられない。そして五分後には彼は「暗き中にわれ立ちて」と歌っていたが、その一方で外からメンデルスゾーンの「春の歌」が中にいる我々のところへ響いてきた。格別のデュ

エットで、しかも我々「不本意なるトクシマ人」にとってはじつに特徴的だ。距離を保つ権利を感じる為には、先ずかつての生活の仕方を至極意図的に思い出さねばならないのに、どれほど耐え難い事柄が我々には既に慣れっこになってしまったことか。しかしまたどれほど多くの物事を我々はそれと同じ慣れから罵っているだろう。それはまさに我々がそれについての叱責を日々の習慣にしてしまったからである。私の友人も音楽に関してはまったくそんな具合だ。それ故我々の友人である芸術家たちも、真面目な仕事を更なる進展を妨げられたりはしていない。真面目な仕事？事実その励み具合においても、またその目的とする点においても、この音楽活動の仕方は真面目と呼んで差し支えない。我々は今日 25 回目のコンサートの準備を行っているので、成果が音楽振興の類も飾ったのか、また我々は目的・目標に近づいたのかどうかについて一度考えることが出来る。

ともかくも音楽を自己目的として据えてみよう。つまり楽団は優れた音楽を見事に示すべく練習をする、という非常な労苦をしたにちがいない。優れた音楽だよ！どうかともかくも第 25 回の音楽シリーズを聞いて欲しい。そして考えてみて欲しい！ここへやってきた時我々には、鉛筆書きの四声の男声合唱用歌曲以外に、何一つ楽譜はなかったし、ここでは「楽譜も架台」も持っていなかったし、ここには「ボーテ&ボック社」、あるいは名前はどうぞであれお気に入りの楽器点はないのだ！我々の楽譜店は音楽指揮者の頭の中にあり、指揮者は記憶を絞って我々が持っているものを書き下した。その際彼はベートーヴェンを完全に書き下したりはしなかった。間違った楽譜をこの神々しい音楽の響きへ混ぜることは、あまりに恐れ多い。そこでそれは差し当たっては行進曲、ワルツといったようなものにならざるを得なかった。それはあらゆる細部を含めてごく容易に再現することが出来るし、自分で考えた楽譜を、多分モーツァルトの序曲の場合のように、それほど多くこしらえることもない。しかし徐々に外界への新たな繋がりが現れると、いつもではないにせよ、ますます可能な限り最も美しいものが探し求められ、茶番歌や流行歌はいよいよそれ相応の場所へ追い

やられた一仕事は真面目に！だね。今ややっと我々の音楽演奏で、ひたすら注意深くしてののみ指揮棒の動きが分かる。前方はヴァイオリン奏者たち。我々がコンサートマスターのハイアーが第一譜面台の所にいる。毎朝彼は一団の中にいて、午後のリハーサルの準備をする。しかしそれがそもそも何かに達しなくても、我々の最も新しい会員すらすでにたくましくあちこちのポジションを弾き、それで総譜は難しい箇所があっても、もはや決して変更される必要はなく、彼らはすでにやってのけている。ヴァイオリンのグループと同様に、毎朝ビオラ、チェロ、金管と木管の吹奏楽器グループが一つになっているのが見られる。どれもが彼らの格別な指導者の下にいる！これが真面目な仕事だ、とあなた方も認めるであろう。ところでその成果は？一つの仕事はその成果を見せるのは、すでに達成した仕事の中ではなくて、むしろ更に達成することが出来るもの、そのための基礎を築いたものの中にあるのだ！今、あなた方が聞いているのは我々の冬のプランである。我々はシンフォニーコンサートを提供したいと思っているし、その十分な力を持っていると感じている。勿論マーラーやシュトラウスではない。もしハイドンを披露することができれば、それは我々の誇りだ。室内楽を演奏するつもりで、そしてまた同時にハイドンとモーツァルトを採りあげるが、メンデルスゾーンにも大いに惹きつけられている！

とにもかくにも、これは全くもって素晴らしいことだ。自己目的としての音楽は、やはり演奏者のみのものなのだろう。音楽はやはり全く別の視点からの活動ではあるまいか。仮にもし我々には私の友人を、初めに言及した見解へ導く成果しかないとすれば、それはむしろそのままにしておくべきであろう。ところで君、まあ聞いてくれ！第一に君は僕に、音楽はドイツ文化における一つの星であると告げるだろうし、また、音楽を広めることとはドイツ文化を世界へ運ぶことであると！さて、日本人将校の中に我々はすでに幾人かの友人を獲得したが、彼らは単に聴いているだけではなく言葉を実行にうつす者たちで、また勇敢に努力して「弦の甘い、心地よい音」を呼び寄せようとしている。垣根の向こう側からしか我々の音楽

を聴くことが出来ない、我らが徳島の同胞市民たちの中にも、日々楽譜や楽器への質問が高まり、出入り商人たちからはっきりした言葉で、我々がそのきっかけになっている、と確信させられている。

つまるところ主題は、我々が我々自身に奉仕していることだ。そのことを私は日曜コンサートに来てくれることで証明したいのではなく、また拍手の代わりに唯一認められている、ブラヴォーと大声で叫んで証明したいのでもない。そうではない！我々のリハーサルに来て、ここの片隅、その窓際、あそこの階段の上でじっと静かにこっそりと座って、音楽を高価な贈り物のように受け容れている全ての者たちの、喜び幸せに満ちた顔を見て欲しいのだ。それが何といっても最も美しく、心の底からの誇らしい言葉「真面目な仕事」を証明する。

そこで私は、ついでながら沢山の名前を持つ我が友人に、始めから望むことを語らせたい！我々はドイツ文化を広めることが出来る。我々はドイツ文化を身につけたいと思っている人たちに素晴らしい幸せを贈りたいと思っている。もし冬が来ても平和という大きな素晴らしい贈り物がもたらされないのなら、どうか冬は厳しくなく、そういう成果を更に沢山贈ってくださいように。

演 劇

数ヶ月来、我々はこの表題の下で何一つ書くことが出来なかったし、同じように長いこと、収容所の物置小屋の中の我々の舞台は錆付いている。しかし今舞台は、不死鳥のように灰から再び蘇る瞬間がやって来た。つまり収容所長が芝居の上演を再び認可してくれた。

この知らせは収容所に必ずや大きな喜びを引き起こすだろう。それは当然だ！というのも今や冬が我々に、望みうる限りといえるほどの豊かな夕べを次々にもたらしてくれるだろうから。つまり演劇上演、シンフォニー

コンサートにその他のコンサート、講演と朗読の夕べだ。

最初の芝居は 11 月に上演されるはずで、それ故まもなく必要な準備に取り掛かるべく、多くの器用な手を持つ人々が動き出すであろう。

しかし何よりも先ず、俳優たちが必要だ！可能な限り協力する大勢のスタッフが形成される必要がある。そこでこの件に意欲と関心のある各位は、ブランドウ海軍主計少尉補殿の元へ申し出ることをお願いする。

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 55 問解答

1. Th5 - h3 任意の手
2. T, L で詰み

第 56 問解答

1. Sf8 - d7 Td4 x d3
2. Dg6 - e6 + Kd5 x e4 (e6)
あるいは Lf4 x e6
3. De6 x e5, (Te4 x e5)(Sd7 - f6) 詰み

第 56 問その他の解答

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1. Dc2 x d3 | 1. Dc2 - e2 |
| 2. Te4 x e5 + Kd5 - c4 | 2. Sd7 - b6 + Sc8 x b6 |
| 3. Te5 x c5 詰み | 3. Dg6 - d6 詰み |

正解を送ってきたのはバウムガルテン、ヨーゼフ・ヴェーバー、ボーナー。

第 57 問 白 : Ka1, Df5, Lc1, Sb2, e3, Bd2, f4

黒 : Kb4, La4, Sf4, Ba5, b5, b3, c5

2 手詰め

第 58 問 白 : Kh3, Df7, Sc2, f4, Bb5, d3, h2

黒 : Ke5, Ta4, f1, Ld4, Sa5, b7, Bc5, g3, h5

3 手詰め

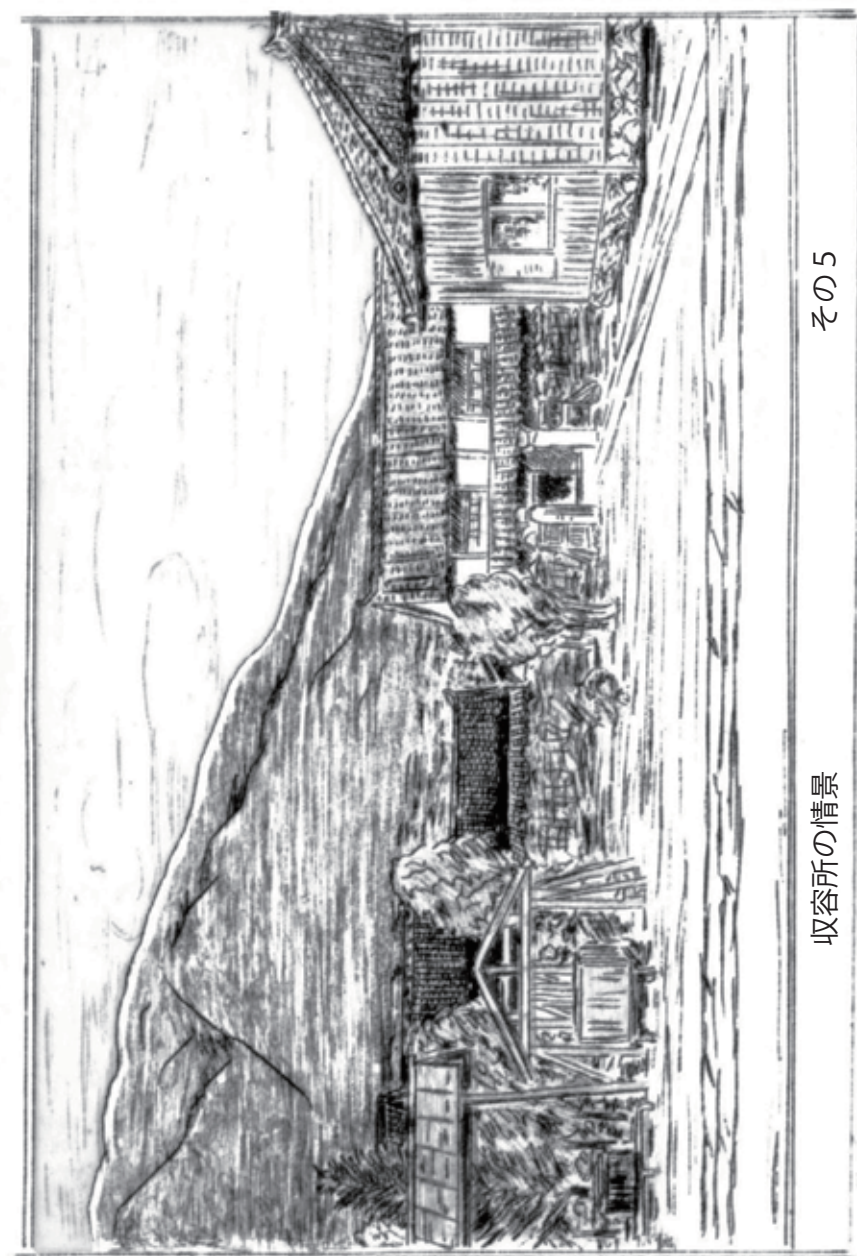
灰緑色の制服の海軍（第2部）

2月1日の陸軍部隊による交代の日まで、ドイツ西部軍の右翼戦隊は戦場にあり、とりわけ12月と1月には海と陸からの容赦のない敵の攻撃を撃退した。イギリス艦からの砲撃に対して当時応戦したのは野砲の射撃だけだった。野砲の優れた働きについては、先ごろ公刊されたイギリスのフッド海軍大将の報告が物語っている。

今日、イギリスの乗り物は攻撃後甚大な損害を記録せざるをえないだろう。12月には師団が膨らんで出来た海兵軍団は海岸を固めた。オランダの国境とミッデルケルケとの間には、セメントで重くなった砂浜の砂が、重い、実に重い大砲の砲列を支えている。2、3ヶ月の経過の内に、多分世界で最も長い、最強の海岸堡壘が出来上がった。ほとんど圧倒的な印象に富むその堡壘は、北西方向に永遠の効果を見せて威嚇し、軍事的意思を常に主張する決意を表している。そこではドイツ人が誇りとして喜ぶたいのは、ドイツ人の力とドイツ人の技のみがきわめて短期間に、永遠のために、それを建設することができたとの意識である。砂丘のもろい砂を地盤に固めることは、きっと永遠に続くような仕事だったに違いない。しかしそれは夜を徹してなしとげられ、またなんとか苦勞して材料と重たい大砲を運びこめたのだった。このように延々と砲台がすでに戦闘準備を整えて設置されると、堡壘の中にいる海軍砲兵隊の連中たちは、今や彼らの日常勤務と居住性をよくする任務のために生活している。大砲の足場の下の中には、砲撃に耐える塹壕と広々した電灯の灯りが点る兵営ベッド付の小部屋が隠されている。ドイツ本国の衛戍病院出身ではない主任医師は、フランドル海岸沿いの砂丘の砂を天井とする仮包帯所としては、飾りつけもずっと見事で、清潔にして便利な手術室を作り出している。我々の水兵たちは工作を趣味とする者たちがいて、中には各種の技術者や学校出の職人がある。彼らは水道付の洗い場をこしらえ、砲台の後ろには庭を、それも手の込んだ緑地を造り、花や野菜を栽培し、樹木を植えている。植木鉢

としては打ち寄せられた敵の機雷が用いられるが、鉢の周りには蔦が巻きついている。海から引き上げられるものは実に多く、専門知識を持った者によって中を空にされ、我々にとってはかなり大量の予備爆弾になっている。大きな球状の鉄製の覆いを水兵は見事な色彩で塗り、旗や鷲ないしは機知に富んだ言葉をその上に描いて、それに土や植物を詰め、飾りとして壺をその上に置く。自然やその被造物に寄せるドイツ人の愛を、水兵は鳥たちにもはっきりと示す。兵營の繁みの中のつぐみの巢のことは、砲台の水兵同様に指揮官も知っていて、見つけるとなごやかな眼をする。もちろん砲台鳥は査閲され、検査されるが、しかし兵站リストにも掲載される。空と水と砂の間で日の光が時折忍び寄って単調に輝こうとする。だが作業計画表は故国同様に防弾室の壁に掛かっている、我が兵士たちが嬉々として健やかに海辺の歩哨に就く活動の手配をしている。

将校たちが午後、乗馬訓練で馬を乗り回して、ちょうどブロッケンベルへの東にいた時、警報が鳴り響いたのだった。すばやく馬から砂地へと飛び降りた。鞭を手にして彼らは砲台へ駆け込んだ。そこでは海軍砲兵隊のがっしりした大男たちが喜び勇んで大砲の元へ急ぎ走った。15センチ砲の砲台の監視少尉は、一隻の敵駆逐艦について、駈けてきたために荒い息を吐いている指揮官に報告した。約14キロの距離に微かに黒い影が、背後の晴れた空の水面に深く垂れ込めた灰色の中にちらついていた。水兵たちは鋭い目つきで眺める。「東へ進んでいる」と中尉は確信的につぶやき、まもなく「第1小隊発砲」と命じた。電話でそのことが2名の大砲係りへ伝達される。2名の水兵が大砲の引き金を引く。それぞれの鋼鉄の口から閃光が走る。灼熱の波によって、紙切れと煙が砂の上を渦巻きながら後方へ飛んでいく。しかし見開いた砲兵隊員の目が靄の中を目標に向かって遠くを眺めている。一方無骨な拳が大砲の尾栓をさっと開けて、急いで新たな弾薬を砲身の中へ押し込む。ついにはとうとうイギリス人の毛皮を焦がすことが出来るほどの笑いに嬉々とする熱意が、仕事に羽が生えたほどに急ピッチで仕上げた。多分一分ほど続いてから、観察する目には垂れ込め



收容所の情景

その5

た灰色の中の黒い影のすぐ近くで、2本の大きな水柱が上がるのが見える。それから隣の小隊の砲撃弾がそちらに向かって一斉に撃ち込まれる。隣の堡塁では全砲台による一斉射撃が炸裂する。---

それから六つの丸太のような右の拳が満足げに左手を打ち、六つのほくそえむ唇が「当たった!」とつぶやく。黒い影はずっと小さくなったように見える。海岸の右側の角に艦か舳先を我々の砲台へ向けて、明らかに動かず、つまり損傷を受けて、敵の駆逐艦が停止している。しかしなおも駆逐艦は沈まずに浮いて、新たな一斉射撃が炸裂する。数分がゆっくりと過ぎる。影は再び大きくなって、岸に向かって迫って来るように思われる。全く突然それは舳先か艦を海面高くに上げて、致命傷を負って脇へ転がり、そして一船腹を上にして浮かんでいる! 砲座の男たちの顔つきはこわばり、憎々しげに唇を閉じている。きびきびした手は体の脇にだらりと下がっている。敵の殲滅作業は終わった。

つづく

愛するアンナ！

サルが木から落ちるほどびっくりした。これはひどい。君が目撃者だった男から聞いた、僕がフランス兵に頭を撃ち落されたなんてことは起きちゃいないんだ。でも、そいつがひょっとして僕の頭を手元に持っていたかなどという証拠は投げ出したいよ。ひょっとしたらその同じ男が不正直な意図をもつ昔のつぶれ頭かもしれない。ともかく間違った噂は信じないように。でも僕が君に嘘偽りを与えるつもりはないことを君が感じ取れるように、頭は無くなっていないとの中尉殿による公的調査書を同封した。というのもそんな事に僕は首を突っ込んではいない。

愛するアンナ！でも今僕が君に伝えなければならないことは、僕たちがしばしば騒動おこる不穏な時代に生きているということだ。なぜなら僕たちの小隊が歩哨で大型テントに横になっていた時、僕は城からりんごの入った籠を調達した。城では伯爵夫人が多分夫に食べさせるために、そのりんごでフランス風リングムース作りを考えたのだ。しかしそうはならなかった。君がしばしば枢密官殿のために作ったように、僕はそれでドイツ風ムースをこしらえた。そのムースを僕は少しずつ食べるために伸びて広がった缶詰の缶の中へ入れた。けれどもそう考えるや否や、その気持ちも終わりになったんだ。愛するアンナ！その後僕たちの歩哨が入って来て、中隊は偵察隊へ発砲したある村を掃討する命令を受けた。そこで僕はりんごムースを背囊の上に縛りつけて、一緒に村を目指して離れた。ねえ君、ひょっとしてもし君がまだ市街戦をしたことがなければ、頭の中で考えてくれ、これは一つの楽しみだ。それに対して僕が言いたいのは、村へ行く途中に小高い所があったんだが、それはフランスの牛だったということだ。そこに僕はつまずいて、顔面を打ってしまった。これには中隊中で一斉に笑いが起り、中尉殿はこう言った。クネチュケ、顔の汚れを拭い給え。さもないと我々は戦うことが出来ない！僕が非常な腹立ちを感じたことは多

分信じてもらえるだろう。というのは、それがとても大きな牛だったに違いないことから、このことは些細なことではなかった。それから僕たちはさらに駆け足をして村へ入った。しかしそこで彼らは僕たちの上に砲弾の嵐をぶちまけ、ある者がこれはありえないことだ、と言った。そのために中隊は一分間啞然として立ちすくみ、当惑して頭を掻いたんだ、愛するアンナ！そして背囊の上に縛りつけていたりんごムースを弾が打ち抜いた。その弾はダムダム弾だったに違いない。それはつまり缶詰の缶が爆発して、りんごムースが僕の首筋と背中を走り下り、そこでどうなったかは見て取れたけれど、それは君に僕は出来れば言いたくない。今や再び陽気な大笑いが起こって、事実中尉殿は僕にこう言った。神々しきクネチュケよ！そして彼は眼から涙を拭った。でも僕は、それが心底同情から発したとは思っていない。それから中尉殿は叫んだ。さて屈強な若者たちよ！僕の方はすぐさまりんごムースの関連で、これは名誉に関わる係争だ、と独り言を言った。

愛するアンナ！何故ならこんな馬鹿げたことをこの僕に向かってするのは許せない。それで僕はある戦略的な動きを、敵の弾が落ちた建物の扉に対して企てた。この扉が壊れていたので、僕は扉の背後に狡賢く置かれていた緑の顔料の入った木桶の中に落ち込んでしまった。というのはこの家は染色工場だったのだ。中隊長殿が僕が木桶から出てきたのを見ていなかったのはよしとする。多分中隊長は再び神々しきクネチュケと叱責したことだろう。

愛するアンナ！これでもう君は多分分かったと思う。もううんざりして、僕は階段を上ってとある小部屋に入った。そこに下劣な野郎たちが詰めていて、その窓からりんごムース目がけて弾を撃ったのだ。ひょっとしたらそこでタバコを吸っていたんだ！というのもこれは名誉に関わる行為で、それは僕と一緒にすることは出来ないのだ。僕が君にただ言っておきたいことは、僕はムシューたちの最後の奴のせいで、手提げランプを壊してしまったことだ。この状況に触れるのは、ひとえに君が書いているから

だ。君たちにはもうランプに注ぐ油がないと。その一方でつまり壊れた手提げランプにはたっぷり油があり、その油で僕はまるで芯のように油臭くなっている。

愛するアンナ！でも君はいまひょっとすると自分の中に母親の心を感じているだろう。というのも僕のところに子供が一人いる。その子のことは実に悲しい事件だった。つまり両親はつまみ出されてしまって、僕は戦闘後の野営の際に、涙を流しているその子に遭遇した。そこで僕はその子を外套の中に受け容れて、その子に少しばかりパンを流し込んだ。そのせいでその子は嬉々として喜んだ。ミルクは持っていなかった。それで僕はすばやく農場へ行って、フランスの牝牛の乳を僕の飯盒の中へ搾った。この牝牛は甚だしい悪意に満ちていて、それで激しく抵抗したために、一度は靴の中にミルクが入ったくらいだ。でもこのジョッキーは頭部が丸っこくて具合が悪く、その子に与えるための栄養物をほとんどこぼしてしまった。でも牛はいろいろと考えてもそれを貫徹できず、僕はたっぷり液体をしばれたから、その子に栄養のある物を与えることができた。その子は僕の膝の上にいる。

愛するアンナ！そこで君は多分、多くの不幸な出来事のせいで僕は全身ずぶぬれだと思っているだろうね。

そろそろまた出発なので、この辺で手紙を終えなければいけない。

心から新年の挨拶をおくる。

君を心から愛する

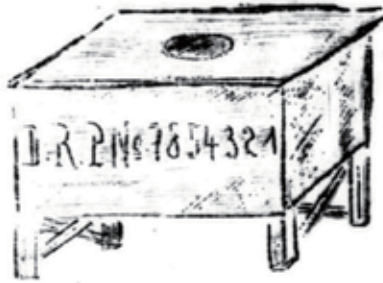
ハインリヒ・クネチュケ



ロイター電

ニキタはその軍勢の先頭へと赴く！





モットー
備え
あれば
憂い無し

我々は今日読者に画期的な発明を知らせることが出来る。

それは我々の収容所のひらめきにあふれる頭脳が長くあれこれ考えた後うまく考え出したものだ。

人間はいつでもたとえば突然発生する飢餓から身を守らねばならない、との認識から発して、機知に富むその発明者は、高貴な慎ましさから自分の名前を知らせたがらないが、まさにあっと驚くほどの実用的な単純な装置を組み立てた。

つまりは「ジャガイモ節約箱」。

図版から解るように、その装置は腰掛として役立ち、その主目的は装置の上部にかなりの量の（15 ポンドまで !!）ジャガイモを収納できる。そして格別重要なことだが、ジャガイモの皮むきの最中に、これに気がつかれることはないのだ。



取っ手としても同時に使える“投げ入れ口”が設けられている。

実演は残念ながら

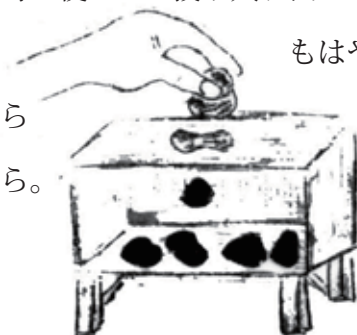
もはや可能ではない。

それはある方面から
異議が出されたから。

これに対して相当な

特許はすべての

文化国家に申請され
ている。



ネズミの大量発生！



皆が走り、休み、逃げ、誰もが先頭になろうとする。

箒の重装備をしてネズミを追いかける。

やつは椅子、ベンチ、ベッドの上を越えて、上を越えて跳んでゆき
そしていまや走って、追いかけても、再び巣穴へ逃げ込む。

大発生を除去すべく、罠を沢山工夫した。

しかし翌朝分かったことは、ネズミの思考は別だということ。

最近すでにそういう動物に足の指を半分食いちぎられた。

それが信じられないなら、今日でもなお

その哀れな男を見ることができる。

どうやってネズミの災いを防げるか、あ
る手段が語っている。

それは簡単だ、ネズミをみんな捕まえて、

さっさと殴り殺す
こと！

